



TITLE:

8. 退職にあたって --サルたちと過ごした42年--

AUTHOR(S):

鈴木, 樹理

CITATION:

鈴木, 樹理. 8. 退職にあたって --サルたちと過ごした42年--. 霊長類研究所年報 2022, 52: 110-111

ISSUE DATE:

2022-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/278827>

RIGHT:

8. 退職にあたって

神経科学研究部門 統合脳システム分野 高田昌彦

定年退職に際して、一言ご挨拶させていただきます。2009年4月に着任して以来、13年にわたり大変お世話になりました。私は長い間サル（特にマカク）を用いた脳科学研究に従事してきましたが、霊長研での様々な先生方との交流を通して、脳科学研究にサルを用いることの意義、つまり（脳科学に限った話ではないですが）「ヒトへの進化を知るための霊長類研究」、「ヒトのモデルとしての霊長類研究」の重要性を改めて認識することができました。また、霊長類学の総合研究拠点としての霊長研のミッション、在り方についても私なりに理解することができると共に、ようやく霊長研の一員になれた気がしたことをよく覚えています。霊長研に着任した当時、私が進めていた中心的研究テーマであり、また世界的に見てもパイオニア的アプローチであった、「霊長類脳への外来遺伝子導入に最適な新規ウイルスベクターシステムの開発とそれを用いた多様な霊長類モデルの作出」を円滑に推進するためには、優れた研究環境と豊富な研究リソースが必要不可欠でした。現在まで予想以上の研究成果を上げることができ、当該研究分野の進展に少なからず寄与することができたことは、ひとえに私の研究を支えてくれた人類進化モデル研究センターの皆さん方とサルたちのおかげであり、この場を借りて深く感謝したいと思います。本来であれば、定年退職後は霊長研の一ファンとして益々の繁栄を見守るつもりでしたが、今般の解体により伝統ある霊長研の名前が消滅したことは誠に遺憾に堪えませんが、これからはその後継となるべく「ヒト行動進化研究センター」の順調な船出と未来への発展を祈念して、私のご挨拶を終わりたいと思います。本当にありがとうございました！

附属人類進化モデル研究センター・鈴木樹理 ～サルたちと過ごした42年～

1983年11月1日、東京大学大学院農学系研究科博士課程を中途退学して霊長類研究所（以下研究所）に就職した。それから38年5ヶ月の間、附属動物実験施設（サル類保健飼育管理施設（以下サル施設）、1999年から人類進化モデル研究センター）の獣医師教員としてサルたちの健康管理と施設の運営に携わってきた。

私がサルと関わりを持ったのは、修士課程に入学した1980年4月まで遡る。当時、私の指導教授はニホンザルの肉眼解剖のアトラス作成を目論んでいた。そのため国立予防衛生研究所（以下予研（現在の国立感染症研究所））からカニクイザルの死体を譲り受け、一部は骨格標本に残りはホルマリン標本にして収集していた。予研では、カニクイザルの腎細胞を使ってポリオワクチンの検定をしており、腎臓の無い多数の死体を入手できた。「死んだ」サルを相手に私の研究生活が始まった。必要なデータを収集するために研究所や日本モンキーセンターにも出入りしていた。博士課程に進学し、興味が「生きた」サルに変わり、国立予防衛生研究所筑波医学実験用霊長類センター（現在の医薬基盤・健康・栄養研究所霊長類医学研究センター）でデータを収集していた時にサル施設の助手の公募があり幸いにも採用された。

現在でも続いているように、毎年秋は放飼場の定期健康診断の時期である。着任早々、獣医師として「生きた」サルのまぶたにツベルクリン皮内注射をさせられ、基礎講座出身の私にうまくできるはずもなく、ただただ疲労困憊したのを覚えている。こうして臨床獣医師としての仕事がスタートした。臨床の他に死んだサルたちの死因を究明する病理解剖も主な仕事だった。少し前まで自分が治療していたサルを解剖するのは、自分で自身の判断、処置が正しかったか検証する行為であり、全く言い訳のできない真実を突きつけられることもあり、かなり苦痛を伴うものだった。昔は研究者の動物福祉に関する意識が低く、どうしてこんな原因で実験に使われていたサルが死ななければならなかったのかと、とても憤ったこともあった。いつ頃だったのかははっきり覚えていないのだが、先輩で同僚だった後藤俊二さんと「今まで治療したサルたちがうまく生き延びられたか駄目で死んでしまったか、相撲の星取り表のように見てみたらどうだろうね。」という話をしたことがあった。仕事柄、恐らく研究所内で最もサルの生死に関わってきた、換言すればサルの命に責任を持つ立場だったと自認している。私の38年5ヶ月の星取り表は白星先行か黒星先行か……。どう考えても負け越しだったと、助けられなかったサルたちに申し訳なく思っている。実験失宜で生死の境をさまよう個体も含め、実験動物という性格上、エンドポイントの設定がコンパニオンアニマルなどよりも早くなってしまうのは仕方が無いとは思いますが、それを口実に安易に救命を放棄しなかったかどうか、もっと自分の知識と技量が優れていたら、そのための努力をしっかりとしていれば救えた命があったのではないかと、この頃特に考える。エンドポイントによる安楽殺に加えて、昔は実験のための安楽殺（実験殺）の麻酔も我々サル施設の獣医師が行なわなければならない仕事であった。時によっては、見かねて一連の処置が進むように手伝うことも多かった。死にいく個体が最後に見る人間が自分で

あることが耐えられなかった。今でも自分の手で動物の命を奪う行為には慣れることができず抵抗がある。それもあって、「サル類の飼育管理および使用に関する指針」所謂ガイドラインの策定をきっかけに、研究者が自分の実験に使った個体は最後まで責任を持つ、研究者自ら安楽殺を実施するという方針を取り決めることができた。

今年の3月末で42年にわたるサルとの直接的な関わりが無くなってしまふのはとても寂しい。しかし、たまに動物園や野猿公園でかれらを眺めるぐらいが丁度良いとも思う。多分、今までの癖でかれらの健康状態を無意識に視診している自分がいるような気もするが。

最後に、現在研究所で生きている約1000頭のサルたちが健康で安寧な一生を送れるように、皆さんには日頃から動物福祉に配慮しながら実験を実施していただきたく、お願いして筆を置きたい。

研究所の後継組織の発展と、皆さまのご健勝とより一層のご活躍を祈ります。